

韓国、台湾への道

韓国（本稿では朝鮮半島全体のこと）と台湾への伝道について記す。前月号と一部内容が重なるがご容赦願いたい。

韓国、台湾ともに第二次世界大戦終結に伴い、全ての日本人は引き揚げを余儀なくされた。したがって天理教教会のほとんどが日本に戻ることであった。現在の韓国、台湾の天理教はごく一部を除き、戦後改めて始まったものである。今月号は明治、大正の初期伝道を中心に記述する。

海外への伝道は、まず隣国への伝道が最も自然である。通常の往来で信仰が伝わる場合もある。しかし、現実には海を渡っての伝道は簡単なことではない。

本教史における最初の海外伝道は高知系布教師里見治太郎の韓国釜山伝道だった。里見は明治23年九州布教に行くことと告げ高知を出たが、その後音信はなかった。明治26年1月になって釜山で布教しているとの手紙が高知に届き、布教応援の依頼も記されていた。

高知分教会（現大教会）と里見の所属していた新居出張所（現土南分教会）で相談の結果、里見の養子である半次郎と青木茂が釜山へ渡ることとなった。渡韓直後3人は言葉が通じないことを痛感する。釜山は日本人もかなり住んでいたが韓国語の必要を感じたのは現地の人におたすけを試みたからであろう。

高知分教会では里見らの要請を受け、高知市で韓国語の学校を開くことにした。元外交官の日本人と韓国人信者を教師とし、24人の生徒を集めた。言葉を習得の暁には韓国伝道に出る筈の若者たちだった。しかし、学校運営の問題などのため閉鎖のやむなきに至る。仮に、語学修得した若者が現地に渡り伝道を試みたなら本教が朝鮮半島に根を下ろすことになったかもしれないと想像するが、現実はそうではなかった。

高知系に続き、撫養一香川系若宮出張所（現分教会）の中村順平、岡山県吉備出張所（現分教会）の向井嘉七、瀬戸内海本島の片山好造、大熊こま子などが明治30年以降朝鮮半島へおたすけに渡った。

昭和2年10月時点の『天理教教会名称録』には韓国（現北朝鮮含む）に102カ所もの教会名が記載されている。信者の多くは韓国に住む日本人だったとは言え短期間に大きな発展をしたとみていい。この時点では越乃國一本島系の京城支教会の教会が最も多く、撫養一香川系の若宮支教会、治道一肥長系統も多い。地理的な関係で西日本、中でも四国、九州に本拠を持つ教会からの伝道が多い。

本島系の伝道を少し詳しく書いてみよう。福井県越乃國支教会（現大教会）の布教師佐藤栄佐は明治35年、本島の片山好造の病いを助けた。片山のおたすけを見て姉の大熊こま子も熱心な信者になった。信仰を始めた片山は本島と韓国京城（当時、漢城）を行き来しながら伝道し、大熊こま子も夫松次郎と京城にておたすけを開始した。親戚や知人が信仰をやめさせようと画策したが片山と大熊夫妻および養子の忠次郎の熱心さに親戚、知人も入信するに至る。

当時の京城は年々日本人が増えていたが、衛生状態が思わしくなく、片山らは薬湯「丸天湯」を開業した。これは客の裸を見て身上者を見いだすことにつながったと言う。

明治41年大熊松次郎を担任に京城布教所（現大教会）が設置された。大熊夫婦らに助けられた人たちは次第に韓国各地に

伝道に赴くことになる。すなわち田淵音松は龍山に京龍宣教師（現分教会）を開設（明治42）し、続いて大正元年には大邱に京尚宣教師（現分教会）、大田に大田宣教師（現京太田分教会）、水原に水原宣教師（現京大宮分教会）を設置した。

明治35年には撫養一香川系若宮支教会布教師で山口県長府に住む中村順平が釜山へ伝道に出た。中村は極度の貧窮など辛い思いをしていたが入信後は因縁を悟り、人だすけに励んだ。香川支教会の北島友五郎に奨められ韓国へ渡った。風俗、習慣が異なり、なにより言葉が通じないのには閉口したが辻占売りをしながらおたすけに歩いていた時、日本人ににおたすけがかり、次第に信者が増えた。中村は密航で来ていたため日本に戻らなければならなくなり、後を中村の師匠である大峰仁三郎が受け継ぎ明治37年釜山布教所（現分教会）を設置した。

上記2系統の他では長崎県肥長支教会（現大教会）も韓国に9カ所の教会を有していたが、肥長の韓国関係史料がなく詳しく書けない。長崎にとって韓国、中国は近く、明の時代から交易があり身近な所だった。東から伝わってきた本教を伝える地域として韓国、中国を選んだのは自然ななりゆきでもあった。

台湾伝道の話にうつる。最初に伝道した人は山口県防府系布教師古谷マツである。古谷は明治29年4月、台湾へ渡航した。まさにこの時、内務省から天理教取り締りの訓令が出ている。天理教史ではこの訓令のため国内の伝道をあきらめ海外伝道を志した人がいたとされている。しかし、古谷の場合、少し早い。訓令とは関係なく台湾への伝道を試みたのではなかろうか。マツには子供がなかったので、姪であるイトを養女に迎え、その後、古谷若蔵、イト夫婦も渡台し、マツの伝道を助けた。明治36年には臺府布教所（現分教会）が若蔵を担任として設置された。

続いて明治30年、諸井国三郎ら山名分教会（現大教会）の人たちが台湾の台中で伝道を開始した。諸井は内務省訓令のため沈滞気味だった布教活動を元気づけようと台湾へ渡った。台湾伝道メンバー、一條源次郎は「台湾布教を思い立たれた当時は、天理教全体に係る大ぶしで（あった）」（『生涯の旅』）と述べている。諸井は台湾伝道のために殖産や伝道資金調達支援組織を立ち上げ、台湾統治の水野民政長官や縣知事等を訪問するなど、本教への理解を得るため精力的に活動した。

諸井は渡台の翌明治31年、一條源次郎を担任として台中教会を設立した。現地の人たちは天理教がどんな宗教か想像もできない。言語をはじめ風俗、習慣等を異にする台湾の人々に、まず形の上から導く必要があると考えた。異文化伝道の方法としてこの考えは正しい。というより異文化への「適応」を肌で感じ取っていたのであろう。

台中教会設置の後、台北、台南へも伸展し、さらに台湾の向かいにある中国大陸、厦門にも伸び、それぞれ教会が出来る。大正末、台湾全土の22教会のうち半数以上、12カ所が山名系（名京を含む）であった。

なお、最初に書いたように韓国、台湾とも第二次世界大戦後日本人全てが内地に引き揚げることになり、戦後の伝道はほとんどゼロからの再スタートだった。

現在韓国には八木大教会関係が圧倒的に多く、岐美、敷島が続く。台湾は山名系、敷島系が多い。戦後の伝道史についても書くべきことは多いが紙幅がなくなった。